世界の街角から Vol.73

Germany

北ドイツで過ごした305日間

市田 知子 Tomoko Ichida

農学部教授
専門：EUおよびドイツの農業政策、農村社会学
1960年　東京都生まれ
1982年　東京大学文学部卒業
1985年　お茶の水女子大学人文科学研究科修了
農林水産省農業総合研究所（現農林水産政策研究所）を経て2006年より明治大学農学部勤務
博士（農学）

主な著書・論文
『EU条件不利地域における農政展開　ドイツを中心に』（農山漁村文化協会・2004年）
『A Turning Point of Women, Families and Agriculture in Rural Japan』（共著・学文社・2010年）
『年報　村落社会研究　第53集　協働型集落活動の現状と展望』（共著・農山漁村文化協会・2017年）

所属学会
日本社会学会、日本農業経済学会、日本村落研究学会、日本農村生活学会ほか

2017年4月より10カ月間の在外研究の機会を得た。滞在先はドイツ北部のブラウンシュヴァイク市、連邦政府直轄の農業経済研究所である。正式名称はヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネン研究所、略してチューネン研究所という。チューネンは、北ドイツ生まれの経済学者であり、経済地理学の古典である『孤立国』（1842年）の著者として知られる。

チューネン研究所の建物と入口

ブラウンシュヴァイクは人口約25万の都市であり、ベルリンやミュンヘンのような華やかさはないが、喧騒もなく、自然環境に恵まれた住みやすい都市である。歴史は9世紀にさかのぼる。旧市街には伝統的な木骨造家屋（Fachwerkhaus）が建ち並び、中世のたたずまいを残している。

滞在中に借りていた家も写真のような木骨造の家屋であった。家主によると1890年頃に建てられ、当時、トイレや風呂は共同であった。長らく空き家であったのを1991年に買い取り、大々的に改装して8世帯分の貸家にしたとのことである。

研究所までは片道7kmであり、バスもあるが、5月からはもっぱら自転車で往復していた。高低差は50m程度なので、ちょうどよい運動になる。途中には自転車、歩行者のみ通行可能な道もあり、ペダルをこぎながら季節の移り変わりを感じた。

研究所では科研の課題とも関連する「環境保全型農業の政策と経営実態」を中心に、研究員の人たちから情報収集をするとともに、現場を訪ねることに努めた。

まずは、10年前に一度、訪ねたことのある、EUの農村振興プログラムLEADERの優良事例地、アラ・ライネ谷である。この事例地を担当しているコンサル会社に電話をして、現地で「村の店」を運営している団体の代表を紹介してもらい、7月の土曜日に訪ねた。このオターセンという人口500人の村では2001年、唯一残っていた大手スーパー、エデカが撤退し、最寄りの店が8kmも先になってしまうことから、その前年の12月末、村の有志が住民から資金を募り、EUの支援を受けながらドルフラーデン（村の店）の開業にこぎつけた。2011年にはカフェを併設し、地元住民だけでなく、サイクリング客など外部からも大勢訪れ、交流の場となっている。代表のリューニングさんは10時半から13時半までこちらの質問に丁寧に答え、おまけに地元新聞の記事にしてくださった。

9月はじめ、「日本のAコープ（農協が運営する店舗）について詳しく知りたいので、一度、会って話を聞きたい」というメールが届いた。件の新聞記事を見て興味を持ったという。アラ・ライネ谷の西端に位置する小都市、フェルデンに住む二人の女性からである。結局、私自身が11月にフェルデンを訪ね、お二人と一緒に地元の食べ物やレシピに触れる「女子旅」を楽しんだ。ファーマーズマーケットでStecklübeという大きなカブを買い、賽の目に切り、牛肉や他の野菜と一緒に煮込んで食べた。このカブは、戦争中や貧しい時代の食べ物として長らく敬遠されていたが、近年、伝統野菜として注目されているという。また、Grünkohlという葉が細長いキャベツは、日本で青汁の原料として知られるケールのことであり、これも店頭に並んでいた。茹でて味付けして肉料理などの付け合わせとして食べる。ビタミンが豊富で健康的だという。季節に応じて土地のものを食べるのが身体によいという考えはいずこも同じなのか、と思った。

地元紙に掲載された写真

この家屋の屋根裏に住んでいた

袋詰めで売られているケール